

春先の病害防除について

春は新芽が出てきて、いよいよ本格的な生産シーズンのスタート、と気合いも増してきていることと思います。病原菌や虫たちも春を待ち構えていたかのように動き出します。しっかり対策をして、よりよい果実生産につなげましょう。

今回は、春先の防除が重要なカンキツかいよう病、ナシ黒星病、キウイフルーツかいよう病の3病害の防除対策について紹介します。

カンキツかいよう病

秋に多雨や台風が襲来したり、かいよう病が多発した翌年は発生が多くなります。また、カンキツかいよう病は、三～六月にかけて温暖多雨の年も発生が多くなります。前年の発生や今年の気象状況を踏まえながらしっかり防除していきましょう。

まず、耕種的防除をしっかり行うことが重要です。かいよう病は、傷口や新梢・果実の未成熟期の気孔から侵入します。そのため、剪定時に伝染源となる病斑が認められる枝葉の除去や、風傷の発生を防ぐための防風ネットや防風林等の設置及び点検が有効です。前年のかいよう病の被害枝葉が残っていないか確認しましょう。

かいよう病の発病適温は二五～三〇度ですが、病原菌は平均気温が一〇度を超える頃から活動を始めます。そのため、三月上旬からしっかり防除に取り組みましょう。

発芽前の防除は、IC ボルドー66D 六〇倍を散布しましょう。樹勢が低下した樹や散布予定前に低温に遭遇し、落葉等が心配な場合は、発芽直前の散布を避け、4月以降の防除を徹底してください。

発芽後はコサイド3000(クレフノン二〇〇倍加用)等を散布します。発芽後の新葉が柔らかい時期にIC ボルドー66Dや6-6式ボルドーを散布すると、石灰の影響で葉焼けを生じますが、アビオン-E一〇〇〇倍を加用することで、軽減されます。

なお、ミカンハモグリガの食害は、本病の感染を助長します。そのため、ミカンハモグリガの防除を徹底することも大切です。

ミカンハダニの防除等でマシン油乳剤、黒点病防除等でマンゼブ水和剤(ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブ水和剤等)を銅剤と混用すると銅剤の効果が低下するので、避けましょう。



(カンキツかいよう病)

ナシ黒星病

ナシ黒星病は、三月下旬～七月上旬に気温が低く雨が多いと多発します。また、廃園の近くや剪定枝を放置したままの園では、きちんと防除を行っても効果があがりませんので、早急に処分してください。

黒星病菌は、展葉直後から感染を開始します。発芽直前にキノンドーフロアブルー〇〇〇倍を散布してください。開花前後は黒星病の最も重要な防除時期です。DMI 剤(スコア顆粒水和剤四〇〇〇倍やアンビルフロアブルー〇〇〇倍等)を中心に防除しましょう。SS で防除する場合は、全列走行を実施し、葉表側、葉裏側の両方に薬液が十分に付着するように散布してください。黒星病の発生が多い園(特に露地)では10日以上薬剤散布間隔が空かないように注意してください。

摘果の時期が遅くなると、薬剤が十分果実にかからない、といったことや湿度が高くなることで黒星病の発生が多くなる傾向があります。特に「ここは例年黒星病の発病が多い!!」と思われるところを優先的に早期摘果に取り組みましょう。



(ナシ黒星病)

キウイフルーツかいよう病

キウイフルーツかいよう病は、特に激しい症状を引き起こす Psa3 系統の菌が昨年県内で初めて確認されました。キウイフルーツかいよう病は、葉の斑点症状だけでなく、蕾・花や枝の枯死、樹液の漏出等が生じる病気です。発病樹は樹勢が低下し枯死することもありますので、しっかり防除しましょう。

病原菌は葉の気孔や傷口、枝の傷口等から侵入します。また、風雨や作業器具、接ぎ木等で伝染すると報告されています。柔らかい新芽が出てくる春は非常に感染しやすい時期と考えられます。発芽前は IC ボルドー66D 五〇倍等、発芽後はコサイド 3000 二、〇〇〇倍等で防除しましょう。かいよう病の症状が出た場合、健全な部位に感染を拡げないために病斑部位を切除することが重要です。切除後は、必ず切り口にトップジン M ペーストを塗布してください。管理作業を行う際は、必ず健全樹から開始してください。使用する器具は樹ごとに消毒(エタノール 70%、次亜塩素酸ナトリウム 200ppm 以上等)することを徹底しましょう。

また、これまでかいよう病が発生していなかった圃場で、かいよう病では・・・と思われる写真のような症状が出た場合は、JA の技術員や普及員等にご相談ください。

[キウイフルーツかいよう病]



(花・蕾の枯死)



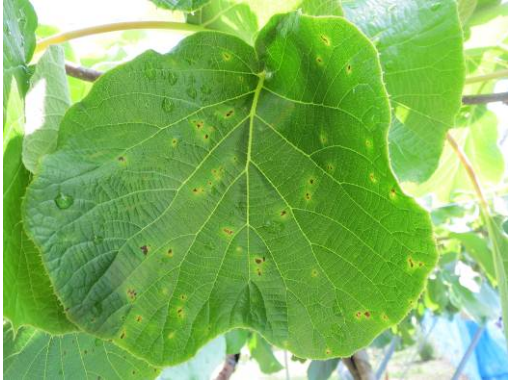
(枝枯れ)



(病原菌を含む乳白色の樹液。次第に赤褐色に変色)



(赤褐色の樹液の漏出)



(葉の斑点)